

ウィニフレッド・ワトソン作
最所篤子訳

ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第九章 午後六時二二分 七時二五分

ミス・ペティグールは幸せでいっぱいでした。身も心も軽々と、宙を浮かんで向こう側のドアまでたどり着けそうな気がします。グラスの底にほんのちよっぴりお酒が残っていました。ミス・ペティグールはそれをこくりと飲み干しました。

ミス・ラフォースは部屋の反対側からミス・ペティグールを見つけていました。この一五分間というもの、ミス・ラフォースの注意はすべて、ミス・ペティグールのいる部屋の隅に注がれていたのです。トニーはずいぶん長くあそこにいるわね。あら、エディスが仲間に加わった。ミス・ラフォースの好奇心に火がつかきました。そこへ知り合いがやってきて目の前を塞ぎ、おしゃべりの相手につかまってしまいました。次に辺りを見渡せるようになったときには、トニーはいなくなっていました。ミス・デユバリーの姿もありません。



島田圭子画

ミス・ペティグルーはとろんとした感じで一人、立っています。顔はここにこし、瞳はきらきらしています。髪が少しほつれ、手には空っぽのワイングラス。

この上なくご機嫌な様子です。あまりにもご機嫌すぎるように見えます。ああいう顔には見覚えがあります。心臓がどきんとなりました。良心がうずきます。グウィネヴィアをほったらかしにすぎたわ。毛皮のコートと黒のドレスで彼女を判断しちゃだめよとトニーに注意しておくのをすっかり忘れてたなんて。ああ、本当に考えなしだったわ。遅すぎなければいいけれど。

友達に上の空で返事をする、やあら彼を置いてきぼりにして、かきわけるように部屋を横切り、守ってあげるべき相手のところに駆けつけました。疑わしげなまなざしが空っぽのワイングラスに向けられています。ミス・ペティグルーは満面の笑顔でミス・ラフォースを迎えました。

「グウィネヴィア」ミス・ラフォースはおろおろと言いました。「くいくいやってなかった?」

「くいくい?」

「脚はぴんしゃんしてるわね」

「ぴんしゃん?」

ミス・ペティグルーは繰り返しました。そしてぐっと顎を上げると、

「脚は」と威厳を持って言いました。「しっかりと立っております」

「見せて」とミス・ラフォースは譲りません。

ミス・ペティグルーは二歩後ろに下がり、二歩前に進みました。なかなかしつかりした足取りです。

「ああよかった!」とミス・ラフォースはほっとして言いました。

「お疑いになるなんて」とミス・ペティグルーはとがめるように言いました。「あたくし、がっくりいたしましたわ」

「悪気はないのよ」とミス・ラフォース。「それに疑ったのはあなたじゃなくてトニーなの」

「チャーミングな若者ですわね」とミス・ペティグルーはつつとりとして言いました。

「少しむらっ気ですけれど。でもお疑いになることは何もありませんのよ。あの方が勧めてくださいったのも、あたくしが頂いたのもほんの一杯だけですもの」

「でもトニーが作ったお酒でしょう」ミス・ラフォースはまだ疑いの解けない、しかも面をしています。

とはいえ、好奇心のほう心配に打ち勝ちました。気になっていることをこれ以上聞かないではいられません。

「彼はどこのなの?」ミス・ラフォースは期待をこめて聞きました。

「誰がどこですって?」

「トニーよ」

「クロークですわ」とミス・ペティグルーは夢見るように言いました。

「まあ！」ミス・ラフォースはがっかりして声をあげました。

「エディスはどこ？」情けなさそうに尋ねます。

「クロークですわ」とミス・ペティグルーはうつとりました。

「まあ！」と、ミス・ラフォースはまた声をあげましたが、その声には興奮の響きがありません。「まあ、グウイネヴィア。まさか……まさか……」

「まさか、なんですか？」

「二人は……一緒なの？」

「あらいけませんの？」とミス・ペティグルー。「聖書にある通り、清い者たちにはす

べてが清いのですわ」

「ああ、ダーリン！」ミス・ラフォースは叫びました。「あなた素晴らしいわ……信じ

られない……奇跡よ。どうやったの？ あたしの言った通りじゃない！ ああよかつ

た！ あなたみたいな素晴らしい人に会ったのははじめてよ。あなたじゃなかったらだ

れにもやれなかったわ。トニーとエディスがよりを戻したなんて」

ミス・ペティグルーは物分りのよさそうな顔をしました。

「まあまあ！ 若い方たちって喧嘩をするものですわ。何でもないことなんですよ。お

二人は顔を合わせたら、なにもかすすいすいといきましたの。とにかく……」

「もちろんすすいすいいくわよ……あなたにはね。でも他の人ならあの二人を仲直りさせ

られなかったでしょうよ。知らないでしょうけど、思いつめちゃって頭にぶんぶん蜂が

回っちゃったトニーって大変なの……。あなたは世界一のミラクルメーカーよ」

ミス・ペティグルーはお手上げでした。この可愛らしいお友達が変てこな言葉でしゃ

べりたいなら、そうさせておきましょう。あたくし、ミス・ペティグルーはそんなこと

気にしません。何を気にすることがありますよ。こんな心から楽しく、しがらみか

ら解放されたのは生まれて初めてです。皆さん、そうしたいのなら変てこな言葉でしゃ

べればいいのです。見たところこの人たちはそれがお気に入りのようですから。何か問

題でも？ もちろん問題なんてありませんとも。

「そうおっしゃるなら」ミス・ペティグルーは気持ちよくうなずきました。

「行きましょ」とミス・ラフォース。

そのとたんミス・ペティグルーは不安に襲われました。ドアのほつに焦った視線を投

げかけます。ずいぶん遠いような気がします。突然、あそこまで行くのにどうしても気

乗りがしなくなりました。

「ねえあなた」とミス・ペティグルーは威厳をもって言いました。「もしよろしかった

ら腕をお貸しくださいな。ちよつとめまいがいたしますの。この人いきれのせいですわ、

きつと。こういう人の多いお部屋に慣れていませんの。窓のひとつも開いてませんし」

「やつぱり！」ミス・ラフォースは怒って言いました。「そつだと思った。いったいト

ニーに何を飲まされたの？ あたしが向こうに行ったときは大丈夫だったのに。今度、

会ったら、こてんぱにしてやるわ。あの人、分かってやったのよ」

「まあそんな！」ミス・ペティグルーが息を呑みました。「いいんですのよ。そんなはずありませんわ……あつてはなりませんわ……そんな恥ずかしいこと、耐えられませんか。この暑さですとも。ええ、暑いからなんですわ」

「いいわ、わかったわ」ミス・ラフォースがなだめます。「もちろん、この暑さよね。さ、興奮しないで。大丈夫よ。外に出れば気分が良くなるわ。この部屋の空気はひどいもの」

ミス・ラフォースはミス・ペティグルーをしっかりと抱えると、部屋を横切っていきました。両側からいろんな声がかかります。

「もう帰るんじゃないよね？」

「ちゃんと飲んだ？」

「まだ酒はたっぷりあるよ」

ミス・ペティグルーはそこにいる誰も彼もに微笑みかけました。ミス・ラフォースは気軽に言い返して相手をかわします。ようやくドアにたどり着いて逃げ出すことができました。

廊下でミス・ペティグルーは立ち止まると息をのみました。

「まあどうしましょう！ こんな素敵な時間を過ごさせていただいて、奥様にお礼のご挨拶をしておなかつたわ。なんと思われるかしら？ あたくし、戻らないと」

「ぜつたいだめよ」とミス・ラフォースが慌てて言いました。「大丈夫。それにモイラをびつくりさせちゃ可哀想よ。あの人、そういうのに慣れてないの」

ミス・ペティグルーは廊下の冷たい空気を浴びてずいぶん気分がよくなりました。

「申しましたとおりですわ。お部屋が暑かったからですよ」

「そう言つてたわね」とミス・ラフォースはちかちかつと瞬きをして言いました。「みんな口バが腰を抜かすくらい喋りまくつてたものね」

「何ですって？」とミス・ペティグルー。

「あの暑さよ」とミス・ラフォース。

「ああ！」ミス・ペティグルーは言いました。なるほど。「暑さ……なんておかしいんでしょう！ まあおかしいこと！」

ミス・ペティグルーは笑い出しました。笑って笑って涙が頬を転がり落ちたほどです。「さて」とミス・ラフォースは朗らかに言いました。「あなた、ちょっと酔っ払っちゃったみたいね」

でも、ちよつとした冗談をこんなに面白がってもらえるなんて、ミス・ラフォースはとてもいい気分でした。二人は大はしゃぎのまま階段を上ります。ミス・ペティグルーは一人で歩けると言いました。しっかりと手すりにつかまって上っていきます。

婦人用のクロークに使われている寝室の外に立つて、ミス・ラフォースはドアをどんと叩き、それを開けました。

「あらあら」とミス・ラフォース。「これはあたしの目がおかしくなったのかしら。それとも本当に男の人がいるの？ ああ純潔の翼よ、汝はいずこへ飛び去りたもう？」

「黙れよ」とトニー。

「デリシア」とミス・デュバリーが叫びました。ミス・デュバリーもきちんとしているどころではありません。実のところ、お化粧を直すと言って出て行ったときよりもずいぶん乱れた姿になっています。

「エディス」ミス・ラフォースが答えました。ぱつと優しい微笑みを浮かべます。ミス・デュバリーはその腕に飛び込んでミス・ラフォースを抱きしめました。

「デリシア。あたしたち、結婚するわ」

「うそみたい！」ミス・ラフォースが叫びました。ミス・デュバリーを負けないくらい幸せそうに抱きしめると、その腕を断固としてはずし、トニーのことも抱きしめるといつてがんばりました。トニーは大人しくそれを受けました。

「おめでとつ、のろまさん。いったいどうしてこんなに時間がかったの？」

トニーがにやりと笑いました。

「結婚証明書に払う金がなくなつてね」

「あらエディスがいつでも貸してくれたのに」
「うん」とトニーは真面目になりました。「どうして僕が彼女と結婚するのか、誰の目にもはつきりするまで、少し待ったほうがいいと思っただ。ほんのちよっぴりの我慢ができなくて船を捨てるのは馬鹿みたいだろ」

「そのとおり」とミス・ラフォース。「自制心があるのはあなたのいいところよ」

「僕の男らしさを分かってくれて嬉しいよ」トニーが控えめに言いました。

「あら全部ちゃんと分かってるわよ」とミス・ラフォースは熱心に言いました。「あたし、はじめの二人の名付け親になるわ。でもその後はもつおことわりよ」

「一三人目も頼むよ」トニーが懇願します。「何か幸運のお守りが必要だもの。不吉な数だからね」

「まあ、トニーだったら」とミス・ラフォース。「そんなこと言って、もう一回キスしてあげるわ」

ミス・ラフォースはもう一度、トニーにキスしました。トニーは嬉しそうな顔をしています。ミス・ペティグールは、もう、誰でも彼でも愛情をふりまくのを見ても、たじろがないようになってきました。だれも気にしていませんから、どうして気にする必要があるのでしょう？ でもミス・ペティグールは少々あつげにとられていました。この場の雰囲気は、こつこつ特別なときにはふさわしくないのじゃないかしら。恥ずかしそうな微笑や、紅潮した頬なんてものは、ミス・デュバリーの顔には影も形もありません。将来の責任を自覚した、重々しい厳肅な雰囲気などトニーには見当たりません。この瞬間にこそふさわしいはずの美しくて感傷的な言葉など、とても口に出しにくいありさまです。でも、ミス・ペティグールはもう我慢できませんでした。

「あの」とミス・ペティグルーは甘い喜びに胸を震わせて、おずおずといいました。「あの……あたくしからもおめでとつと申し上げてよろしいでしょうか」

「ありがとう」とトニー。

「若い恋とは……」とミス・ペティグルーは始めました。

ミス・ラフォースとミス・デュバリーがくるりと振り向きました。ミス・デュバリーの目に浮かんだ表情で、ミス・ペティグルーは、また彼女が飛びついてこようとしているのを感じ取りました。そのとおり。がばつと抱きついてきました。ミス・ペティグルーはこつしたあけつびろげな愛情の示し方にくろたえつつも、芯から心温まるものを感じました。淑女のたしなみとはかけ離れているし、大陸であんなにもはやされている「英国的奥ゆかしさ」のかけらもないけれど、このときばかりはミス・ペティグルーは淑女のつつしみなど、気にもかけませんでした。

ミス・デュバリーはさらうようにしてミス・ペティグルーを熱烈に抱きしめました。

「ああ、あたしのダーリン。どうやってお礼をすればいいの！」また涙が目からこぼれそつです。

「ああ、グウィネヴィア！」ミス・ラフォースが同じくらい胸いっぱいな調子で叫びました。「あなたがいなかったらあたしたちどつなつたかしら？」

「どうやってお返しをしたらいいかわからないわ」ミス・デュバリーは幸せに打ち震えながら言いました。「何でもほしいものがあつたらあたしのところに来て。しわ取りだつて、髪型を変えるんだつて、新しい顔だつて」

「いったい何の話だい？」トニーが聞きました。

「なんでもないわ」ミス・ラフォースとミス・デュバリーが声をそろえます。

「男性には関係ないことよ」とミス・ラフォースがやさしく言いました。「女だけの内緒」

ミス・デュバリーはコートをかきあつめました。

「じゃあ今晚ね」とミス・ラフォース。

「二人で行くわ」とミス・デュバリー。

ドアが閉まりました。

「とても気持ちのいいお嬢さんですこと」とミス・ペティグルー。「ちよつとあたくしの理解を超えていらつしやるけれど」

「さあ急ぎましょ」ミス・ラフォース。「他の人が押し寄せる前に」

二人は家を出ました。ミス・ラフォースは通りかかったタクシーに合図するとミス・ペティグルーを押し込みました。花屋の前に止めると外に出ます。

「ほらね」にこにこしながら帰ってきました。「あなたの「コサージュ」を注文してきたの。あたしは物覚えが悪いなんて言ったのは誰かしら？」

「まあ、なんてご親切に」ミス・ペティグルーは目に涙を浮かべました。

「あなたがエディスにしてくれたことを思ったら！」とミス・ラフォース。「コサージュ

「なんてなんでもないわ」

「でも」と可哀想にミス・ペティグルーは言いました。「あたくし何にも……」

「へりくだるのはなし」とミス・ラフォース。「あたし耳を貸さないわよ」

オーンズロー・マンションに着きました。二人は建物の中に入り、エレベーターに乗って、ミス・ラフォースの部屋まで歩き、ミス・ラフォースが鍵を差し込みました。

ミス・ペティグルーは自分の家に帰ってきたような不思議な感覚を覚えました。午後のお出かけはわくわくしてスリル満点の経験でした。きつとこれから先ずっと、心の糧になってくれるでしょう。でも、それとは比べ物にならないのが、おいしい食事をした後の満足感のようなこの気持ちです。それはミス・ラフォースの家の敷居に足を踏み入れた瞬間に押し寄せてきたのでした。その混じりけない喜びはあまりに強くて、胸が痛むほどでした。ミス・ペティグルーは明日のことを考えないようにしました。明日はこのすべてが夢となってしまふけれど、これは今日なんですから。

ミス・ペティグルーはいそいそ中に入りました。明かりをつけます。電気暖炉のスイッチを入れます。明かりにはおそろいの深紅のシェードがついているので、部屋は居心地のよい温かみのある赤っぽい光に包まれました。

ミス・ラフォースが毛皮のコートを脱ぎ捨てます。

「ああ、一休みね」

暖炉の前の安楽椅子に身を沈めます。

ミス・ペティグルーは毛皮のコートを脱ぐと、ミス・ラフォースよりずっと慎重に脇に置きました。借りたドレスのおかげで、うっとりするほど自分が立派になった気がします。しゃなりしゃなりと歩いてみずにはいられせん。上等の黒いベルベットのおかけでどうしても貴婦人になった気分になってしまふのです。

「座ったら、グウィネヴィア」とミス・ラフォース。「くたびれちゃっわよ」

「全然疲れておりませんわ」とミス・ペティグルーは満足しきって言いました。「興奮してしまつて疲れを感じませんの」

「脚は大丈夫？」

「あたくしの脚は」と新たな威厳を身につけたミス・ペティグルーは言いました。「いっつだって大丈夫でございましたわ。頭がほんの少し熱気で酔つたようになりましたけれど、それだけです」

「ならいいわ」そう言ってミス・ラフォースはにこつとしました。

ミス・ペティグルーは嬉しそうにその隣に座りました。電気暖炉が暖かい光を投げかけます。外は寒々とした暗い一月の街。ミス・ペティグルーとミス・ラフォースは二人つきりで心地よくくつるいで、仲良く座っています。カーテンはひかれ、ドアは閉まり、椅子は暖炉の近くに寄せられています。素晴らしい一日の中で、たぶんこれが一番幸福なひとときのかわ、とミス・ペティグルーは思いました。でもそれはほんのちょっと息を入れるだけの時間で十分です。だってこれから先、ミス・ペティグルーを待ち

受けている長い長い年月には、静かで、何にも起きない時間だけが詰まっているのでしょから。今欲しいのは、平穏な時間ではありません。その反対です。またすぐに、何が起こってくれなくては。そうでなかったら、裏切られたような気がするでしょう。でも、運命の女神はこれまでこんなに気前がよかったのだから、今、くるりと背を向けて、あたくしを見放したりしないはずだわ。何かが起こるはずよ。大人しくして今はこのゆったりとした時間を楽しみましょ。また元気を回復してこのあと起こることに備えなくては。

「どうかしら」とミス・ペティグルーが言い出しました。「あたくし、おいしいお茶を一杯頂けたらと思うんですけど」

「あら！」とミス・ラフォース。

「他の飲み物も目先がかわってたいへん結構でしたわ」とミス・ペティグルーは熱心に言いました。「確かにおかしいくらい楽しい気分になりますものね。でもあたくしいつも言ってるんですの。なんと言っても一番なのは、本当においしい、お・茶・よって」「その通りだわね」とミス・ラフォースはやさしく言いました。「淹れてくるわ」

「じっとしててくださいまし」とミス・ペティグルーが命令しました。「あたくしが……どんなにお茶を淹れるのが好きかご存知ないのですわ……特に喜んでくださる方のためなら」

ミス・ラフォースはミス・ペティグルーの好きにさせました。

ミス・ペティグルーはいそいそとキッチンに入ります。忙しい主婦のように楽しげに動き回ります。ミス・ラフォースのために働くのはなんて楽しいのでしょう。そのとき、鋭い痛みが胸を貫きました。こんなキッチンが自分のものだったらどんなに幸せかしら！ 他の誰かのためになんて二度と働かず、皆が真ん中で幸せそうにしているときに端っこに座っていることもなく、ないがしろにされたり、見下されたり、無視されたりすることもないので。ミス・ペティグルーはその感情を押しやりました。まだ今日は終わっていません。終わっていないのは明らかです。ミス・ラフォースは今晚の予定を立てているし、それにお花だって花屋さんから来るんじゃないの？

電気ポットのお湯が沸きました。ミス・ペティグルーはお茶を入れてビスケットと一緒にお盆にのせると、ミス・ラフォースのところに持って行きました。

「あなたの言う通りね」とミス・ラフォース。「このお茶のおかげで生き返ったわ」

香りがたちのぼるティーカップの向こうから、ミス・ペティグルーは満足そうに微笑みました。

「いつも言ってるんですの。おいしいお茶を一杯いただければ何時間でも頑張れるって」「今何時？」とミス・ラフォースが聞きました。

「もう七時になりますわ」とミス・ペティグルー。

「そう」とミス・ラフォースは物憂げに言いました。「着替えまでまだ何時間もあるわね」

「たしか」とミス・ペティグルーはさりげなく物なれた感じで聞きました。「ナイトクラブでお歌いなんでしたわね」

「そうよ。『深紅の孔雀』でね。ニックの店なの」

「あら!」とミス・ペティグルーは嫌な予感がしました。

「トニーとエディスは幸せそうだったわね」ミス・ラフォースがため息をつきました。その顔には夢見るような、物思いにふけるような表情が浮かんでいます。今にも男性が飛びつきそつな色つぽさです。ミス・ペティグルーの心はさらに沈みました。

「真実のロマンズというのは」とミス・ペティグルーは厳しい調子で言いました。「どんなときでも結婚につながるのですわ。結婚という考えが二人の頭に浮かばないなら、そこには永遠に続く幸せなどないと思ったほうがよろしいわ」

「そのとおりね」とミス・ラフォースが身を縮めました。

「それから」とミス・ペティグルー。「あたくし、あなたがニックと結婚しようなどと思っただけたくありませんわ。とてもお勧めできませんもの」

「とんでもない」ミス・ラフォースはぎよっとして言いました。「ニックと……結婚! 彼、浮気するまで五分もかからないわ」

「ちゃんと見抜いていらつしやるのね」とミス・ペティグルー。「その通りですとも」

「でも恋人としては最高ののよ」とミス・ラフォースは切なげに言いました。

「でしようね」とミス・ペティグルー。「うんと練習を積んで腕を磨いておいでなんですから」

「彼、びつくりするほどレベルが高いの」とミス・ラフォースが訴えるように言いました。

「あたくしが興味があるのは」とミス・ペティグルー。「それを維持する能力ですわ」

「あら!」とミス・ラフォース。

「ほら御覧なさい」とミス・ペティグルー。

「分かったわ」とミス・ラフォースは悲しげに同意しました。

「あなた、女の子の夢を壊すわね」とため息をつきます。

「必要なときだけですわ」とミス・ペティグルーが言い返します。

「ずいぶん敵しいのね」とミス・ラフォースは悪戯っぽく目を光らせます。「あなたのことが怖くなってきちゃったわ」

「大変よろしい」とミス・ペティグルー。

ミス・ラフォースはくすくす笑います。

「お茶に何が入ってるの?」

「まあ!」ミス・ペティグルーは慌てて縮こまりました。「あらまあ、どうしましょう。」

ミス・ラフォース……あたくし決して……そんなつもりじゃ。あたくし……」

「いいから、いいから」ミス・ラフォースがなだめます。「ほんの冗談よ。軽くお夕食はどう? 何を注文しようかしら?」

「お夕食ですって？」とミス・ペティグルー。「あたくしに？ いえいえ結構ですわ。胸がいっぱいで頂けませんわ。消化不良になってまたしゃっくりが出てしまつてせつかくの夜がだいなしになつてしまいました」

「あたしもあんまりお腹すいてないわ」とミス・ラフォースも気だるそうに言いました。「それじやいいことにして後で、軽く何か食べる？」

「それがよつございます」とミス・ペティグルーは賛成しました。

もう一杯お茶を注ぎました。この幕間の時間はとても好ましいものでしたが、少しばかり長引きすぎです。そろそろ何か起きてもいいでしょう。ミス・ラフォースと知り合つてまだ一日も経っていませんが、その間中、何かしら起こっていました。今、ミス・ペティグルーは座つて何かが起こるのを待っています。もし、その調子で物事が起きなければ、ものすごくがっかりするに違いありません。だからベルが鳴ったとき、ミス・ペティグルーは少しも驚きませんでした。すぐに立ち上がると、目に期待を込め、神経を研ぎ澄まして身構えます。戦争？ 殺人？ それとも突然の死？ ミス・ラフォースが立ち上がるうとしています。

「あたくしが出ますわ」とミス・ペティグルー。

でもそれは花が届いただけでした。ミス・ペティグルーは箱をもつてゆっくりと戻つてきました。

「ほら」とミス・ラフォースは箱を開けます。「これよ、これ」

一輪の深紅の薔薇が、柔らかい緑に包まれて、まばゆい輝きを放っています。ミス・ラフォースはそれをミス・ペティグルーの肩に当ててみました。

「エディスが言つたとおりね」ミス・ラフォースは喜びの声をあげました。「色をちらつと入れるだけで黒いドレスに映えるわ。それにグリーンのイヤリングとネックレスが何て言つたらいいかしら……ちょうど……。とにかく完璧よ」言葉が見つからずに口を閉じます。

それをそつとテーブルに置くと、また腰掛けました。そのとき突然、罪の意識がミス・ペティグルーに襲いかかりました。

一日中、あたくしはいろいろなご好意を受け、ミス・ラフォースと対等の口を利き、ミス・ラフォースの友達の家を訪ねたわ。ミス・ラフォースが、あたくしの本当の用向きを知つたならなんと思われるかしら？ 言おうとした、なんていう言い訳は通らないわ。言おうとはしたけれど、半分、上の空だったのだもの。もし本当に言つ気があれば、ちゃんと言えたはずじゃないの。一日の間のほとんどの時間、ミス・ラフォースに話そうなんてちつとも頭に浮かびませんでした。良心がちくちくと痛みます。

ミス・ペティグルーは震えながら、その小さいけれど、はっきりした声を押しやろうとしました。今晚、この人たちの行くところに行きたかつたのです。どうしても、どうしても。ナイトクラブというものに行つてみたい。中でやっていることに加わりたい。楽しい世界の一員になりたい。素直に、正直に、これまでの人生を導いてきた教えをす

っかり放棄してしまつたことを認めました。たつた一日で、悪魔が片目をつぶつたとたんに、墮落してしまつたところか、自分から進んでそこに転がり込んでしまいました。長年、純潔を守つてきたことなんてもつどつでもよくなつてしまいました。誘惑に乗つたことなんてこれまで一度もなかつたというのに。罪深い場所が呼んでいます。音楽が誘いかけます。悪事の巢が魅了します。本当のところ、ミス・ペティグルーはもう一度、トニーが作つてくれたあの素晴らしいお酒を飲みたくになりました。すごい自信と力を与えてくれる素敵な飲み物。言い訳はありません。この罪の道は、両親やこれまでの教えが戒めてきたものだけれど、そのほづが一人ぼっちの純潔の道なんかよりずっとずっと楽しい。ミス・ペティグルーの道徳心はこの試練に勝つことができませんでした。そのことは打ち消しようがありませんでした。

絶望的に室内を見回します。完璧な一日の最後の、完璧な仕上げを見のがすと思つて、失望のあまり気分が悪くなりました。でも、これ以上、偽りの口実でミス・ラフォースの親切に甘えることはできません。ミス・ペティグルーの良心はそんなことをするにはあまりにも強く鍛えられすぎていました。

戻つてくると、ミス・ラフォースの前に座ります。

「ちよつと問題がありますの」とミス・ペティグルーはかすれた、震える声で言いました。「ほんとに、まずこれを片付けなければなりませんわ……」

「あたし、お母さんがいないの」とミス・ラフォース。
ミス・ペティグルーは口をぽかんとあけました。

「というか」ミス・ラフォースは訂正しました。「あたしをこの世に生んでくれた女の人はいたわ。でも、あたしが選んだ人じゃない。あの人がいなくても寂しくないの」
「まあ、お母様を！」ミス・ペティグルーはショックを受けました。

「あんまりいい人ではなかつたのよ」ミス・ラフォースは簡単に言いました。「ほんとのこと言つと、かなり感じの悪い人だった。考えると背筋がぞつとするようなタイプよ。子供にとっては最低だったの。とっても悪いお手本でね。そこに座っているあなたを見ると、もしお母さんを選ばせてもらえるなら、きつとこつという人を選んだらうなつて思うの。あら、ごめんなさい」ミス・ラフォースは身を乗り出しました。「あなたがあたしのお母さんほどの年だつて言ってるんじゃないのよ。それは分かっているの。でもそういうふうと思うのよ。あなたのおかげで自信がわいてくるし、懐かしい気持ちになる。あなたに会えてよかったわ」

「まあどうしましょう！」ミス・ペティグルーは震え声で言いました。「これ以上、ご親切になさらないでくださいまし。あたくしとても耐えられません。慣れてないんですもの」

ミス・ペティグルーの目は涙をいっぱい浮かべています。

「もしお知りになったら……」そして口こもりました。

トントントン。ドンドンドン。ドシンドシンドシン。誰かが拳骨でドアを叩いていま

す。

「やあねえ」とミス・ラフォーヌがうんざりしたように言いました。「いったい誰かしら？ ベルがちゃんとあるのに使えないのかしらね。しょうがない、出るわ」

でも、ミス・ペティグールは立ち上がっていました。涙は魔法のように乾いてしまいました。急に元気を取り戻し、獲物の臭いをかぎつけた猟犬のように武者震いします。あのノックは当たり前のお客ではないことを教えています。告白はどこかに消えてしまいました。

あっという間に部屋を横切り、目をきらきらさせ、顔を輝かせ、背をぴんと伸ばし、ミス・ペティグールはドアをさっさと開けました。